

【実践活動報告】

博士学位取得後の活動報告

Social Innovation Practices after Completing Doctoral Course

本多 幸子 (同志社大学)

HONDA Sachiko (Doshisha University)

1. はじめに

私は 22 歳で大学を卒業してからは航空会社の客室乗務員の仕事を经た後に家庭に入り、初めの 10 年間は 2 人の子供の育児と教育に専念しました。子育てが一段落した 30 歳代後半の頃から夫の会社で社会復帰を始め、そこでの仕事関連で必要性が生じたために無我夢中でコンピュータのプログラミングの勉強をして仕事に活かしていました。

コンピュータの可能性を知ってからは、その楽しさに取り付かれ、これを多くの人に広めたいと思いました。先ず手始めに習得したノウハウを友人たちに伝授したいと思い立ち、デジタルディバイドの解消を目的とした「NPO 法人メディア MAI」を友人たちと共に立ち上げて 15 年間理事長として活動を続けてきました。

コンピュータが一般に普及し始めたばかりの 1990 年代初頭ということもあり、当時あった YMCA 四条烏丸教室の館長からの依頼で京都 YMCA でのコンピュータ講座の運営を任されることになりました。その講座は 5 年間継続することになるのですが、コンピュータ講座のテキストを自分たちで作成してきたという実績もあり、それらをまとめて出版しようということになりました。そこから NPO の活動方向を出版事業に切り替えました。

それからの約 7 年間に出版した本の合計は 26 冊になりました。入門書ばかりでしたが、この分野に素人が進出できたのはコンピュータが一般に本格的に普及する直前の草創期だったからこそ可能になったのだと思っています。ソフトバンク出版からも 4 冊出版することができたことが誇りです。ただ、この分野は、半年も経てば情報の内容が古くなって旬が過ぎてしまいます。進化の早さに付いていくことで精も魂も尽き果ててしまい、アスキー出版からの 2 冊の本の出版を最後にして出版活動を休止することになりました。この間に我々が発刊した出版部数の合計は 20 万部におよびましたので、「デジタルディバイドの解消活動は一定の役割を果たせた」という総括をして NPO を解

散することになりました。

その後は、同志社大学大学院にご縁をいただきお世話になることになりました。

入学の動機は、娘が同志社大学大学院社会学部の博士後期課程生、息子が総合政策科学研究科の修士課程生でしたので、その楽しそうな姿を見て 2 人の子供たちが通っている大学院で私も研究生生活を送りたいと思ったことでした。

私は 2004 年に同志社大学大学院総合政策科学研究科に入学し、修士論文のテーマは、『第 3 ステージにおける女性の自己実現— 社会起業 (Social Enterprise) の可能性—』としました。この論文では、自分自身が理事長として活動してきた NPO 法人での実践活動を中心に上げ、ソーシャル・イノベーターとして活躍する女性の活動をまとめました。

また、博士学位論文のテーマは、『公共空間の理論と動態に関する一考察——市民的創造の視点から』と題して、ドイツの哲学者ユルゲン・ハバーマス (Jürgen Habermas) の公共圏の理論を基軸にして、公共空間論の歴史的展開や古今東西の実践事例などを研究してきました。このテーマを選択した遠因は、同志社大学大学院に入学する前の 3 年間に京都大学大学院の吉田純教授の下で研究生としてハバーマスの公共圏の理論を勉強してきたことにあります。

授与された博士学位は「博士・政策科学・同志社大学」ではあるものの、私自身はソーシャル・イノベーション研究コースに強い帰属感を抱き、研究とは次元を異にする実践レベルではソーシャル・イノベーターであろうと努めてきました。そのため、自分の社会的活動がソーシャル・イノベーターに当たるのかを常に自問してきましたが、顧みて、志はあれども実践を伴うことの難しさを痛感しています。今回与えられた機会を利用して、私が 10 年間でどれだけのことをなし得たかを自省の念を込めながら振り返ってみることにします。

2. 大学院への再入学と地域公共人材開発機構での勤務

(1)ソーシャル・イノベーション研究コース博士後期課程への入学

2010年3月に政策科学の博士学位を取得後、引き続いて総合政策科学研究科博士後期課程ソーシャル・イノベーション研究コースを受験して大学院後期課程に再入学しました。

再び総合政策科学研究科の大学院生になって、ソーシャル・イノベーションの視点で研究を続けたいと思ったからです。

論文のテーマを『パブリック・キャリア・デザインの実証的研究一般財団法人・地域公共人材開発機構をフィールドとして』としました。

このテーマを選んだ由来は、私自身が草創期の「一般財団法人・地域公共人材開発機構」にコーディネーターとして5年間関わったことにあります。論文では、特定の地域社会（例：京丹後地域）において公益実現に貢献できる人材のキャリア・デザインはいかにあるべきか、社会実験もまじえて、実証的に考察することにしました。

(2)地域公共人材開発機構での勤務

私は、2009年10月から「一般財団法人・地域公共人材開発機構」にキャリアコーディネーターとして、職員のキャリア形成を支援する仕事を担当しました。

本事業は、地方分権時代を迎えて、地域社会における公共活動を産・官・学・民の各セクターで広く担うための新たな人材である「地域公共人材」のキャリアパスを開発するために、京都の地域公共の担い手と期待される求職者を機構で雇用し、「地域公共人材」を育成するプログラム（「地域公共人材」育成プログラム）を開発することを目的としたものです。育成した人材を各地方自治体や企業などで雇用し、「異なるセクター間の文化的・機能的な壁を越えた協働型社会における地域の公共的活動や政策形成を主導コーディネートできる人材」として地域社会で活動してもらうことになりました。

私はこの仕事を担当するために、キャリアコーディネーターの資格も取得しました。以上の経験から、私の大学院での研究の目的は、育成された公共人材のキャリア・デザインの有効性を実証することになりました。その後、私は同志社大学の嘱託教員に採用されることになるのですが、大学院での担当科目の1つの「キャップ・ストーン」を受講することが「地域公共政策士」の資格を得るための必要条件となりました。

3. 再生可能エネルギーの普及を目指して

(1)めぐみプロジェクトの始動

①背景

2011年3月11日の東日本大震災津波によって福島第一原発事故が引き起こされました。これが引き金となって、ドイツは原子力発電政策を一転させ、2022年までに全原発の廃炉を決定しました。日本でもすべての原子力発電が一時停止となり、当時の民主党政権は再エネの固定価格買取制度を法制化し、日本国政府も再エネ促進に舵を切ることになりました。

政府の再エネ促進の方針が生まれたことによって、総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コースで博士号を取得された手塚勲氏が考案して特許を取得された、太陽光パネルを備える建物」を普及するための「めぐみプロジェクト」が始動しました。太陽光パネルを備える建物の知的財産権の技術明細については以下、手塚氏の博士論文（2016）より引用します。

筆者が考案した太陽光パネルを備える建物に関し、とくに建坪に対する屋根面積を大きくして、発電電力の大きな太陽光パネルを固定してなる建物に関する知的財産権の技術明細を以下に特許の文章¹を軸にしながら論じる。

屋根に太陽光パネルを固定する建物は、太陽光パネルの発電電力が、面積に比例して大きくなるため、太陽光線に照射される屋根の面積を大きくすることが大切である。建物は、片流れ屋根にすれば屋根面積を大きくできる。片流れ屋根は、全面を太陽光線に照射される面にできるので、切り妻屋根や寄せ棟屋根の建物に比較して、太陽光パネルを設置して発電電力を大きくすることができる。

片流れ屋根の建物は、切り妻屋根などの建物に比較して、太陽光線に照射される屋根面積を広くできる。ただ、従来の片流れ屋根は、外壁からの突出量が少なく、建物の建坪に対して屋根面積が制約されて十分な屋根面積を実現できない。このため、屋根に設置される太陽光パネルの面積が制約されて、発電電力を大きくするのが難しいという欠点があった。（手塚 2016: 40）

個人住宅の屋根に太陽光パネルを敷き詰めて電気を得ることは以前から行われてきました。当然ながら、屋根に置く太陽光パネルの枚数が多ければ多いほど、発電量は増加します。しかし、底が突き出すほど屋根を大きくすると、強風にあおられて屋根が損壊する恐れがあります。これが「煽り負荷問題」です。手塚氏は軒桁と大梁の交差部分を十字状補強金具で補強することでこの問題を解決することに成功しました。このような特徴ある構造をもった家

を手塚氏は「めぐみ+の家」と命名し、徳島県阿南市に最初の実証実験棟を建設しました。

②実証実験棟建設@徳島の成果

2014年8月10日に徳島市を襲った台風11号は最大瞬間風速33.2m/sを、阿南市では最大瞬間風速44m/sを記録したのですが、十字状補強金物で補強した構造体で建設された第一実証実験棟(阿南市)と第三実証実験棟(徳島市)は、1.5~2.5mも軒を突出させた構造になっているにもかかわらず建物に何ら損傷はなかったそうです。

また、徳島県阿南市の実証実験棟では地理的な優位性もあって、ソーラーパネルからは当初の想定以上の発電が可能となりました。その結果、当住宅の施主が20年間で得られる売電収入は建築コストを上回ることが試算で明らかになり、施主は大喜びされました。

2011年の福島第一原子力発電所の事故で原子力発電への危惧の念と太陽光や風力を利用した再生可能エネルギーへの期待が社会に広がったことはご承知の通りです。これまで、電力は電力会社が供給するものという“常識”を私たちは信じて疑いませんでした。しかし、個人住宅をはじめ、建物や空き地にできるだけ多くの太陽光パネルを設置すれば、相当な発電量を実現することができます。つまり、市民が発電の主体になることが可能になるのです。とくに、「めぐみ+の家」は通常の切妻型屋根よりも3倍から6倍の枚数の太陽光パネルを設置することが可能です。わが国において化石燃料や原子力に依存しない再生可能エネルギーの比率を上げることが、地球温暖化抑制や脱原発といった社会的価値を高めることにもつながります。この点に強く共鳴した私は「めぐみ+の家」を普及するソーシャル・ビジネスを京都で展開する決意を固めたのです。

(2)京都ソーシャル・エステイト株式会社設立

京都ソーシャル・エステイト株式会社は、株式会社ソーシャル・イノベーションの関連会社として2012年7月31日に創業し、同年10月17日京都市中京区に設立されました。代表取締役は私、本多幸子が就任し、手塚勲氏考案のソーラーパネル一体型住宅「京都式めぐみ+の家」の普及を企業目的としました。

しかも、単に再生可能エネルギーの普及を目指すのみならず、京都の伝統ある町並みとの調和を実現することを標榜する点でも、ソーシャル・ビジネス性の強い企業と言えます。

具体的な事業としては、再生可能エネルギー

に関する普及活動および研究開発、ならびに個々の施主の要望や条件に応じた住宅の企画・立案・現地調査、設計・施工・管理をおこなうこととしました。以前に取得していたインテリア・コーディネーターの資格も活かすことができることに加えて、長男の妻にも声をかけ、二人で勉強して揃って宅地建物取引士の国家資格も取得しました。

①企業の特徴

京都ソーシャル・エステイトでは、大容量発電による固定価格買取制度を利用し、経済的理由により空き家になっている家、また寺社敷地内にある建造物の建て替えなど、経済的価値と景観的価値を両立させることを目指しました。ここでの経済的価値は、投下資本に対する売電料と賃貸料の収入による初期投資回収比率の高さです。一方、景観的価値とは、歴史的な建造物や町並みに親和的な建築デザインを生み出すことです。

しかし、京都ソーシャル・エステイト株式会社の事業は単に住宅販売事業に留まるものではありませんでした。企業理念としては、ドイツのような市民によるエネルギーヴェンデを志向していることに加え、その理念を実現するために、商品としての「めぐみ+の家」の購入者がソーラーハウスの居住者であるとともに、再エネ推進とそれによる地球環境保全の一翼を担う行動的市民としての意識を持ち、将来的に日本でも設立されるであろうドイツ型エネルギーヴェンデ・ネットワークにも参画するように働きかけることを企業活動の主たる目的としていました。

ただ、ドイツのエネルギーヴェンデ・ネットワークが失敗だと評価されているいま(URL3)、今後進むべき道は、グリーン技術の価格を化石燃料の費用よりも安くする技術的イノベーションを起こすことだと思います。誰もが再生エネルギーに切り替えることになるはずで、そのためにはより効率的な次世代の再生可能エネルギーと蓄電池技術、スマートグリッドのためのグリーン技術の開発に投資を集中させることが必要でしょう。

②京都実証実験棟「めぐみ+の家」建設

京都ソーシャル・エステイト株式会社は、すでに京都市伏見区において、「京都式めぐみ+の家」の実証実験棟を完成させ、展覧に供しています。この実験棟の特色は、京都市の厳しい景観規制がかけられている伏見区の一隅で、一方における歴史的景観保護という公益的要請

と、他方における従来の5倍以上の枚数のソーラーパネルを搭載するという企業的要請を、京都市当局との粘り強い交渉の結果として、建築デザイン的に統合せしめた点にあります。

「京都式めぐみ+の家」の実証実験棟のソーラーハウスとしての性能は、民主党政権時代の2009年11月に始まった「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」保証買取価格を42円/kwに設定できたこともあり、メーカー予想値を上回る月平均95,000円を実現しています。公定買取期間が20年であること、ソーラー・パネルの原価が約600万円であることを考慮すると、1,500万円を超える“純益”を太陽の恵みとして享受できるわけです。この実験棟が建設された敷地は、従前は、月極駐車場であり、月平均150,000円の駐車場収入がありました。しかし、この建設用地は、京阪電車の伏見桃山駅と中書島駅からそれぞれ徒歩7分の位置にあることに加え前面が南向きという地の利を活かしてソーラーパネル一体型賃貸住宅としての実験棟を建設することとしました。

「メゾン・ド・トニー」と命名した賃貸住宅は全室で8室あり、1室当たりの平均賃貸料は70,000円に設定しましたが、立地の良さもあって建築中から満室になりました。「メゾン・ド・トニー」は、「エイブル保証」という会社に借り上げを委託しているため、賃貸収入の1割は管理運営費、修繕積み立て費用として毎月約40,000円を「エイブル保証」に支払っています。「エイブル保証」との契約は20年間。駐車場に比べて20年間での総額では、約74,000,000円の収入の差が出ることになります。



写真1 2016年10月(中島撮影)

③成果と課題

京都ソーシャル・エステイト株式会社では、この大容量発電による固定価格買取制度を利用して、経済的理由により空き家になっている家、また寺社敷地内にある建物の建て替えなど、経済的価値と景観的価値を同時に達成するこ

とを企画しました。京都市内に寺社は約2,500寺存在し、その多くが経済的に裕福でないことを考慮すると、潜在的なニーズは決して小さくないと考えられます。本事業の実施を通じて実績ができれば、寺社相互のネットワークによって評判が広まり、今後同様の事業が大きく飛躍すると考えたのです。

一方、京都市内での空き家は11万戸にも上り問題となっています。うち13,000戸は腐朽・破損が原因で空き家となっており、こちらにも潜在的なニーズは大きいと考えられます。京都ソーシャル・エステイト株式会社は、以上の京都独特の状況を分析調査して、京都のスピリチュアルな歴史資産ともいえる寺社の財政上の経営問題や空き家問題の解決を志向した事業展開を進めました。

とはいえ、現在の政権が再生可能エネルギーの普及を推進するのではなく、原子力発電の維持と拡大をエネルギー政策の柱の一つとして、太陽光で発電した電力の買取価格は当初の42円/kwから年ごとに段階的に漸減していき、2019年には2009年に固定価格買取制度の適用対象となった住宅用太陽光発電の買取が終了することになります。いわゆる「2019年問題」です。買取保証期間が満了すると、買取価格が下がるだけでなく、電力会社によっては再生可能エネルギーによる発電の買取を制限するところまでできています。そうすると、売電自体ができない恐れも発生します。そうすると、売電目的で住宅の屋根に太陽光パネルを設置する意味は大幅に薄れてしまいます。そのため「めぐみ+の家」普及のめどが立たなくなってしまったのはたいへん残念でした。

もっとも、電気を「売る」ことよりも「使う」ことを目的にすれば、個人用住宅に太陽光パネルを設置することの意義、したがって、発電量の大きい「めぐみ+の家」の商品価値は、まだ大きいといえます。とくに、最近性能が向上するとともに価格も下がってきている蓄電池と併用することで、余剰電力をこれまで通り電力会社に売電できるだけでなく、パワコン²が不要な蓄電池に充電された電気を利用することで、電力会社から購入する電気を大幅に節約することが可能になります。また、不意の停電にも対応できることから、防災用設備としても活用可能だと思われます。

3. Air B&B の経営とシェアリング・エコノミーへの開眼

(1)シェアリング・エコノミーの台頭

シェアリング・エコノミーとは、インターネットを介して個人と個人の間で使っていないモノ・場所・技能などを貸し借りするサービスのことを言います（URL 2）。

乗り物、住居、家具、服など、個人所有の資産を他人に貸し出しをする、あるいは、貸し出しを仲介するサービスを指し、近年、欲しいものを購入するのではなく、必要なときに借りればよい、他人と共有すればよいという考えを持つ人やニーズが増えており、そのような人々と、所有物を提供したい人々を引き合わせるインターネット上のサービスが注目を集めています。すでに世界的に普及しているカーシェアリングなどはその先駆けと言えるでしょう（村上 2004）。モノやサービスを特定の個人や組織が独占してそれを排他的に利用するのではなく、必要とする他の個人や組織にも利用の機会を提供して共用することの背景には利他の思想があると考えられます。シェアリング・エコノミーは適正な対価を要求することがほとんどであることから、単なる“施し”とは一線を画しています。

(2) 宿泊提供を超えた交流～Air B&B の経営

前に述べた、革新的ソーラーパネルの京都実証実験棟「めぐみ+（プラス）の家」としての「メゾン・ド・トニー」は、8室のうちの2室を合体させてオーナーズルームとしています。このオーナーズルームを使用して 2017 年から 2018 年にかけての 2 年間、Air B&B の経営をしました。この間に宿泊した人は、季節による変動はありますが、1 か月あたりのべ 50 人くらいになりました。日本、中国、台湾、韓国、マレーシア、シンガポール、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどの国からの主にインバウンド観光客を迎えました。

「メゾン・ド・トニー」がある伏見区は多くの観光資源に恵まれています。伏見稲荷、寺田屋、月桂冠大蔵酒造記念館、伏見の酒蔵、十石船や三十石船、加えて宇治や大阪へのアクセスがいいので、滞在中の宿泊客に数多くの体験をしていただくことができました。

Air B&B では宿泊客からの評価が表示されるため、宿泊客はその評価を基準に宿を探してから宿泊の申し込みをしてこられます。その施設は清潔であるか、宿泊客への対応はどうか、コストパフォーマンスが良いかなどの評価項目があり、おかげ様で常に最高の A 評価を頂いたために、「スーパーホスト」の称号をいただくことができました。

(3) 成果と課題

Air B&B の運営では宿泊提供を超えた多くの交流が生まれています。宿泊者と一緒に京都の名所を訪れたり宇治に出掛けたりもしました。各国の色々な世代の人々との交流は常に刺激的で活気溢れた毎日でした。

Air B&B のシステムではオーナーは宿泊費の 3%を Air B&B に支払い、宿泊者は 7%を Air B&B に支払うことになっています。宿泊者に比べてオーナーの数が圧倒的にすくないためにオーナーにとって有利な条件設定になっています。また宿泊料金はカード決済の前払いとなっているため、宿泊者からは確実に料金が支払われることになります。

Air B&B は、Brian Chesky と Joe Gebbia の 2 人がサンフランシスコでのアパートの家賃が払えなくなることから、国際デザインカンファレンスの時に自宅アパートのロフトを貸出したことがきっかけで創設されましたが（ボツマン&ロジャース 2010: 6-12）、Air B&B を運営してみてアメリカの若い起業家の発想力の素晴らしさを身に染みて感じる事ができました。

可能であれば Air B&B の事業を今後も継続したいとは思っていますが、京都市の民泊事業への規制が厳しくなり、役所への手続きが煩雑になったために、現在は休眠しています。

とはいえ、世界中の多くの人と接する楽しさは忘れがたく、自分自身の性格にも合っているのではないかと思いますので、折を見て再開するかも知れません。

4. 学部・大学院教育への参与

同志社大学で政策学の博士学位取得後に再びソーシャル・イノベーションコース後期課程を受験しました。2 回目の博士後期課程生です。大学院生活があまりにも楽しかったので、再度、総合政策科学研究科の博士後期課程生になることを希望しました。入学後しばらくしてから、ある政策学部の先生から、「既に博士号を取得しているのに、いつまでも大学院生でいいで大学の方で教える立場になってはどうですか？」とお声がけいただきました。私自身はそのつもりではいませんでしたので迷い、他の先生にも相談させていただいたら、「その選択もいいですね。」と言っていただきましたので、2 つ目の博士後期課程は退学することにして同志社大学の嘱託講師としての仕事をさせていただくことになりました。所属は政策学部で、大学院と学部を受け持つことになりました。

娘の本務校は他大学ではありますが、同志社大学の教育学科の方でも嘱託講師を拝命していますので、母娘で同志社大学で働くことになりました。

政策学部ではアカデミックスキル担当になり、次の科目を受け持つことになりました。以下、大学・大学院の担当科目と共にそれぞれのシラバスを記すことにします。

(1)政策学部アカデミックスキル

①ほんまものの京都学

1200 年余の歴史を誇る京都。その京都に新島襄らによって設立された同志社大学自身、豊富な歴史的資産に囲まれ、かつ自らが日本近代史の一翼を担う存在でもあり、その同志社に学ぶ政策学部生にとって「京都」は様々な意味において政策的かつソーシャル・イノベーション的な資源であります。その京都も、実は、オーバートーリズムや空き家問題等、様々な問題を抱えています。この科目では、京都でほぼ半世紀にわたって生活、仕事、趣味等々の領域で京都を楽しみ熟知している講師が、京都をめぐる様々な論点をディベート課題として提示しながら、ダイアログを通じて自らを豊かにする“京都学”を伝授します。

②サステナブル学

1960 年に約 30 億人だった世界人口は、2012 年には 70 億人を突破し、世界経済は拡大の一途をたどっています。しかし、地球という惑星には環境容量があり、人口拡大と経済成長には自ずと限界があります。その意味、人類社会にとって持続可能な経済社会を構築することは喫緊の課題であるし、その構成員である私たち一人一人にも、資源を浪費せず、できるだけ環境に負荷をかけない生き方が問われています。この講義では、持続可能なライフスタイルとは何か、それはどのように実現可能なのか、多角的な視点から考察を進めていきます。

③プレゼンテーション学

自分の思いや主張を適確に相手に伝え、しかも同意や賞賛を得るコミュニケーションの方法がプレゼンテーションです。一定のプレゼンテーションの技能を身につけることは、大学でも社会でも、しかるべき仕事をするために不可欠になっています。また、すぐれたプレゼンテーションは、スティーブ・ジョブズの「驚異のプレゼン」や TED カンファレンスが示すように、世界的な感動を呼ぶのであります。この講義では、すぐれたプレゼンテーションとはどの

ようなものか、その条件とは何か等を理論的に考えながら、受講生自身がプレゼンを行い、自らのプレゼン能力を向上させることを目的とします。

④女性のキャリア学

日本は OECD 加盟国の中でも決して女性の地位が高くない国です。政府の高官や企業の役員を見ても女性の割合は圧倒的に少なく、しかし、そのことは日本の女性の能力や意識が低いことを意味しません。サッカーの「なでしこジャパン」に象徴されるように、日本女性の活躍は世界の注目を集めているし、識者の中にはむしろ日本男子の能力と活力の低下を嘆く声さえあるほどです。中でも、京都には新島八重に代表されるように、進取の気性に富み、先進を歩む女性たちが歴史的にも現代的にも少なくありません。しかし、本授業では、歴史上の“偉大な”女性達を取り上げるのではなく、市井のどこにでもいそうで、しかし熱いミッションを胸に、イノベーションを起こすべくがんばっている等身大の女性達を取り上げ、とくに若い女性の学生とともに、これから女性が果たすべき役割と女性パワーの可能性について、考察し検討していきます。学生、とくに女子学生が、実際に社会で活躍している女性達の活躍を検討することで、女性であることに自信と誇りを持ち、これからの社会で女性が果たすべき役割と女性パワーの可能性について考え、発言できるようになることを念じています。

(2)大学院総合政策科学研究科

①政策科学特講

この講義は、大学院総合政策科学研究科同窓会「総政会」が中心となって運営します。この講義では、大学院総合政策科学研究科（以下、総政）の学びの特色である、理論と実践の両面から社会の問題解決にアプローチする点に注目し、総政で学んだ人々を、社会の問題解決の現場で、理論と実践を架橋する存在（架橋者）として位置づけ、受講者各人が「架橋者」としての立ち位置、視点、役割を考えることを通じて、大学院での学びを実社会でどのように活かし、自らのキャリア形成につなげるかを考えます。

具体的には、社会の各分野で活躍する総政修了者が講師となり、近年、地球規模課題解決のための世界共通の目標として広まりつつある「持続可能な開発目標（SDGs）」の主要目標を目当てとしながら、社会各分野の取り組みや課題を「架橋者」の視点から読み解きます。受講

者各人にはこれを手掛かりとして、それぞれの取り組む分野での「架橋者」としての青写真を描いていただきます。

本年度から総政会の会長を拝命することになりました。総政の後輩諸氏に対して、常任理事の方々とともに、できるかぎりの研究上・生活上の支援を行っていきたいと思っています。

②地域インターンシップ

「地域インターンシップ」では、様々な分野で先進的な活動を展開している個人や団体のもとでのインターンシップ(実習)を通じて、先進的な理論やスキルを身につけることを目的とします。具体的な実習先は、面談を経て、各受講生と個別的に相談の上、選定します。

「地域インターンシップ」の授業でまとめた論文は、ソーシャル・イノベーション研究コースの修士論文で先行事例の実践活動として位置付けていただきます。

③キャップストーン

この科目は、一般財団法人・地域公共人材開発機構の「地域公共政策士」プログラムと連動した履修証明プログラムの科目として実施します。科目のサブタイトルは、「キャップストーン（地域再生工学）」です。京都府北部などの地域力が衰退しつつある地域において、実際に地域に入り、そこで地域力再生のために活動している地元住民・団体、NPO、行政機関とその職員等と協働しながら、地域再生の方途を実践的な地域貢献活動を通じ、探究します。単位取得のためには、少なくとも90分×15コマ＝約23時間以上、現地に入ることが求められます。

「キャップストーン」の授業でまとめた論文は、ソーシャル・イノベーション研究コースの学位論文で、受講者の実践活動として位置付けていただきます。

また、この講義の受講者は、先に記した「一般財団法人地域公共人材開発機構」から「公共政策士」に認定される要件の一つを取得することになります。

(3)成果と課題

同志社大学嘱託講師の仕事は、おかげ様で沢山の受講生に恵まれて毎回楽しく担当させていただきました。

政策学部ではアカデミックスキル担当でしたが、常に定員一杯の学生に受講していただきました。学生によると、「本多先生の授業は人気があるので、いつも抽選です。」と言って貰

えています。私の方も若い学生から、沢山の刺激を受けて張り切って授業をすることができました。おかげ様で、実年齢よりも若い気持ちでいられた気がします。

ただ大学院の方ですが、社会経験も豊富で意識の高い方が沢山おられるので、私の方が学ばせていただいたという感じです。とは言え、授業はいつも和気あいあいとしていますので、受講生の方たちとは仲間意識が強まった感じがしています。みなさんとは、これからも仲間としてお付き合いが続いていくことを願っています。

5. 次世代教育への関心

(1)動機と背景

次世代教育への本格的な関心は2015年の8月に息子に男の子が誕生し、3年後の2018年の5月には娘に男の子が誕生したことに始まります。息子の住まいは車で5分の距離にあり、週末には息子の家族と食事をする事が多く、娘とは同居をしています。特に娘の方は大学教員の職を持っていますので、娘の仕事が在るときは私が育児の相当の部分を担当することになります。

以前から次世代教育に関心を持ってはいましたが、新しく誕生した孫たちを「如何に世の中のためになるような人に育てるには」ということから始まり、「生きるための力の育成について」や、「やる気を持つ子に育てるには」などなど数えれば切りがないのですが、ただの子守り婆さんになるのは勿体ないので、時間に余裕のある私自身も研鑽しなければと思ったことが始まりです。

(2)大徳寺龍光院での子供論語塾

京都市北区紫野にある大徳寺の塔頭の一つに龍光院というお寺があります。国宝・重要文化財の建物や美術品を多数有していますが、観光を目的とした拝観は一切受け付けておらず、特別公開の類も行わない、いわゆる拝観拒絶の寺院です。そのお寺で毎月一回、「寸松塾」という子供論語塾が開かれています。

龍光院は、約400年前に江月宗玩和尚様が開かれたお寺です。江月和尚様は堺の豪商、津田宗久の次男として生まれた方です。このお寺は、黒田如水(官兵衛)を祀るために息子の黒田長政が建立しましたが、歴代の高松宮家の方たちも祀られています。

龍光院では日本に三つしかない、国宝の曜変天目茶碗をはじめ沢山の国宝を所蔵しておら

れますが、これらの国宝は、江月和尚様の実家から送られたものだそうです。

普段は拝観できない龍光院ですが、「寸松塾」の日には子供たちのために開門されています。「寸松塾」の日は、朝の9時前に子供たちは小堀月浦和尚様と一緒に抹茶とお茶菓子を頂きます。そのあとには、子供たちは大きな筆で論語の中の一文字を書きます。和尚様が毎月、論語の中から選ばれた一文字です。これが終わると小一時間の作務をおこないます。お寺の畑の周りであったり、お墓の草抜きであったり、国宝のお寺の廊下の拭き掃除のときもあります。お味噌や納豆作りのときがあり、冬には紙漉き体験もさせていただき、その次の月には自分たちが漉いた和紙に毛筆で論語の一文字を書きます。

作務の後は国宝の本堂での座禅です。この座禅には赤ちゃんも参加するために一般的な座禅とは違って、座禅の最中に子供の泣き声が響くこともあります。それでも和尚様は意に介さずに座禅を続けられます。私などは、国宝の本堂に子供たちが入って、何か壊れでもでましたらとハラハラするのですが、不思議なことに誰一人としてお寺の中でいたずらはしません。子供ながらもピンと張りつめた空気を感じ取るのかもしれません。

座禅の終了後にはお菓子が配られます。昔ながらの芋けんぴや果物のときもあります。8月の夏の子供祭りのときには流しそうめんやカレーライス、綿菓子や焼きそば、鶏のから揚げなど子供たちの大好物が提供されます。12月にはお餅つきがあって、あんこ餅やきなこ餅、納豆餅なども用意されていてバラエティに富んだイベントが毎月、用意されています。子供たちのためのお寺の方の準備は毎月大変なものだと思います。感謝感謝です。

さて、次が本命の子供論語塾です。論語塾には安岡定子先生が東京から来て授業してくださっています。定子先生は、昭和天皇に論語を進講したこともある安岡正篤先生のお孫さんに当たる方です。定子先生は日本中で引っ張りだこの方なのですが、毎月欠かさず龍光院に来てくださっています。

孔子先生は、春秋時代末期の紀元551年に中国に生まれた思想家で儒教の開祖ですが、沢山の弟子を育てました。論語は、周知のように、孔子先生の死後にその弟子たちが記録し編纂した孔子先生の言行録になります。龍光院の子供論語塾では、日本の昔の寺子屋で行われていたように論語の素読が行われています。素読は定子先生が読み上げる論語の文章を子ども

たちが耳で聞いたままに発声する形式なので、字が読めない子供も声を張り上げて復唱できます。これを繰り返すことで、やがて子供の口から自然に論語の文章がすらすらと出てくるようになります。

安岡定子先生は、日本中の小さい子供からお年寄りにも授業をされていますので、小さい子供たちにもよく解るように論語の解説をしてくださいます。まず、季節の移ろいや行事を例に出しながらその日の論語が理解できるように導入してくださいます(安岡 2012)。

毎回20篇ほどの論語の素読を終えた後に論語のカードを並べて、子供たちにかかるた取りのように自分の気に入ったカードを選ばせます。そのカードを持って全員の子供たちが年齢順に前に出て、カードに書いてある論語の文章を読み上げます。

子供たちには、それぞれお気に入りの論語があって、それを大きな声で読み上げます。多くの小さい子供たちは、「子曰わく、辞は達するのみ。」という章句を得意とするようです。4歳になった私の孫にも得意の論語があります。「子、四を以て教う。文、行、忠、信。」です。私が特訓して言えるようにしましたが、まだ本人には意味が解っていません。何れこの意味が解るようになるときがきますので、その時に気づいてくれたらいいと思っています。

日本で最初にノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生は、小さいときに祖父から論語を特訓されたそうです。その時は苦痛であったそうですが、長じて学者になったときには難解な論文を難なく読みこなせたそうです。おじい様が亡くなったあとに小さいときに特訓してくださったことに感謝されたそうです³。

次の一万円札の顔に決まった明治時代の実業家、渋沢栄一翁は約500もの企業を起こされ「日本資本主義の父」とい呼ばれた経済人ですが、その講演をまとめた『論語と算盤』という本の中で、『論語』とソロバンというかけ離れたものを一致させることが、今日の急務だと自分は考えているのである。」(渋沢 2010)と述べられていますが、子供たちにも世の中のためになる生き方とは何かを学んで欲しいと願っています。

(3)塾(学研)の運営

2018年の6月から、娘と二人で学研という塾の運営を行っています。幼児と小学生対象ですが、算数、国語、英語の3教科を週に2日教えています。学研を始めようと思ったきっかけは、誕生した孫たちの勉強を見る必要があると

思い、学研が最新の学習指導要領に沿った教材を提供していることに興味を持ったことに始まります。また、娘は教育学の教員で、幼稚園や小学校教員を目指す学生を育成している立場から、最新の学習指導要領に沿った教材の研究をしたいとも思ったからです。

学研の教材は、文科省の学習指導要領を徹底的に研究して作成されているので、この教材を使ってきちんと勉強すれば必ず力が付くように構成されています。また、学研の方針としては、小学生の間に自学自習をする習慣を身に付けさせることです。この習慣が身に付いていれば、その後は自分一人で勉強していく子供に育つことになります。

学研では先生に対して、月に三度ほど、本部から来る各分野の専門家による研修が行われます。この研修会では最新の文科省の情報も得ることができますので、今後の方針を立てるうえでかなり勉強になります。

私の運営する塾の方針は、論語塾で習得した寺子屋のような雰囲気持ち、勉強だけができればいいというものではなく、子供たちには「何のために勉強するのか」を考える子に育てて欲しいと考えています。私の教室では現在 12 人の子供たちが学んでいます、おかげ様でどの子も日々、目に見えて成長しています。これからはどんどん受講生が増えてくる気配ですが、数を増やすことよりも一人一人の子供たちを丁寧に見守っていきたいと思っています。

学研では中学生の分野もありますが、現在の興味の範囲は小学生なので、下の孫が小学校を卒業するまでの 10 年後くらいまではこのまま続けるつもりです。

(4) キャンプ体験

息子の趣味はキャンプです。同志社大学の総政を終了した後は商社でシステムエンジニアとして 10 年間勤務していましたが、2018 年の 8 月から夫の会社に就職して経理を担当しています。その生活の中で、サッカー一筋の生活から、休日には息子と一緒に家族でキャンプに行くことに楽しみを見出したようです。

私自身は友人たちと一緒にグランピングに行って、豪華なキャンプも体験してきましたが、2015 年に誕生した男の子が 4 歳になり、春から幼稚園に通っていますので、いまでは孫を中心とした企画が優先しています。孫は自然の中で思いっきり駆け回り、魚を捕まえたりバーベキューを楽しんでいます。コテージを借りるときには私も誘われますので、できるだけ参加するようにしています。春には小浜の漁師宿に泊

まって早朝から定置網漁の船に乗せてもらい、これ以上ないくらい新鮮なお魚を提供してもらいました。夏にも小浜で蛸網漁体験をして、たこ焼きを思う存分食べてきました。年末年始の家族旅行では当分の間は優雅な外国旅行ではなくて、温泉のあるコテージで過ごすことになりそうです。

息子は、生きた鶏を締めて命の大切さを子供に教えるような活動にも挑戦していきたいと思っています。孫たちにはキャンプ体験でサバイバル能力を身につけて、大規模災害をも乗り越えられるような生きる力を身につけて行って欲しいと願っています。

(5) 成果と課題

龍光院の小堀月浦和尚様とは約 10 年前にご縁をいただきました。それからほとんど毎月第 4 日曜日にはお寺に通っていますので、100 回以上も「寸松塾」に参加させていただいたことになります。おかげさまで、少しは論語が身についたかも知れません。

龍光院では全てが「ほんまもん」を提供されます。本堂や庫裡は国宝ですが、近年に建設された漬物蔵でさえも中村外二工務店で建てられた、「ほんまもん」の厳選された木材を使われています。水回りは最新のものが設置されていて、棚の隅々まで埃一つありません。

お掃除は禅宗のお寺の修行の中心とは言われているものの、これほどまで綺麗なお掃除されているので、「ほんまもん」が光っています。

畑の野菜ももちろん無農薬で育てられています。夏のお土産に頂く胡瓜のお漬物も畑の胡瓜を和尚様が漬けられたものです、年末に頂く手作りの梅干しも畑の梅の木から収穫されたものです。お味噌や納豆も子供たちが前年度の作務で作ったものです。これらに使う塩も日本中から一番のものを採られます。提供される食べ物すべてが、手に入る最高のものです。子供たちはここでの体験から、ほんまもんを肌で感じて吸収していきます。これらの体験によって本質を見る力を養ってもらっていますので、これほどの心の栄養はないと思っています。

一方、一年半前から運営している学研教室では、地域の子供たちの学力の伸びが顕著です。昔から「読み書きそろばん」と言われていますが、子供たちも何もしなければ学力は付きませんし、コツコツと継続することは大切であると実感しています。成長していく子供たちの将来が楽しみです。

6. おわりに

博士学位論文を授与できたのは 59 歳のときでした。還暦を目前にして、その喜びは子供を出産したときと同じくらいの嬉しさであったことが思いだされます。53 歳で修士課程に入学して 55 歳で修士学位を取得し、続いて後期課程に進学してから 4 年の歳月を費やしましたが漸く擱筆することができました。

指導教授の今里滋先生のご指導の賜です。それから丁度 10 年が過ぎ、来年に古希を迎えることになりました。この度の機会を頂戴し、博士学位取得後の 10 年間の自分の足跡を振り返っていましたが、この間の活動はソーシャル・イノベーターとして如何ほどの成果をあげられたかと自問しているところです。

お陰さまで、大学院では人生で最高の楽しい時間と友人に恵まれて今日まで過ごさせていただきました。自分自身がソーシャル・イノベーターになり得たのかは甚だ疑問ではありますが、多くのソーシャル・イノベーターの方々と時間を共有させていただけたことで刺激を得ることができ、これが何ものにも代えがたい

宝物になっています。

人生 100 年時代と言われていますが、古希を迎えることになった現在、未だに「七十にして心の欲する所に従えども、矩を越えず」という境地には至っていません。しかし、「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」という高みを目指して百寿を全うできるよう、人生いかに生きるべきかについての探求を続けてゆきたいと思っています。

いま興味を持っていることは地元、京都伏見のまちづくりです。博士論文の研究テーマである公共空間論を実践するために、地元で培ったネットワークを活かして、新しいまちづくりの活動に参加できればと思っています。

1 週間に一度の水泳に加えて孫に教えるためのヴァイオリンのレッスンを継続しながら、残された時間も今まで同様に楽しく幸せな時を過ごしていくことができたらと思っています。ご縁をいただいた全ての方々に感謝申し上げます。有り難うございました。

引用文献

(日本語文献)

- 渋沢栄一〔守屋淳訳〕(2010)『論語と算盤：現代語訳』筑摩書房。
- 手塚勲(2016)「知的財産権の無償開放を通じたソーシャル・イノベーションの実証的研究：革新的木造建築デザインによる省エネ・再エネ社会の発展を目指して」博士学位論文(博士・ソーシャル・イノベーション・同志社大学)。
- ボッツマン、レイチェル・ロジャース、ルー〔関美和訳〕(2010)『シェア：〈共有〉からビジネスを生み出す新戦略』日本放送出版協会。
- 村上敦(2004)『カーシェアリングが地球を救う』洋泉社。
- 伊與田覺(2013)『現代訳 仮名論語』特定非営利活動法人 論語普及会。

- 狩野直禎(2015)『60 分で名著解説 論語』日経ビジネス人文庫。
- 安岡定子(2012)『自分を支える論語の言葉 50』三省書房。

(URL)

- URL 1 蓄電池バンク 2019 年 10 月 29 日取得、
<http://batterybank.jp/basic/problem.php>。
- URL 2 一般社団法人シェアリングエコノミー協会 2019 年 11 月 6 日取得、<https://sharing-economy.jp/ja/>。
- URL 3 ドイツのエネルギーヴェンデ(大転換)の失敗から学ぶ教訓 2019 年 11 月 23 日取得、
https://www.huffingtonpost.jp/bjorn-lomborg/energy-germany_b_5144506.html。

注

- 1 特許公開「太陽電池パネルを備える建物」(特許庁 公開番号 2014-98249)。
- 2 「パワコン」はパワー・コンディショナーの略で、太陽光パネル等によって発電された直流電流を交流に変換して、家庭等でも利用できるようにする機器である。パワコンは和製英語で、英語ではインバータという。ハイブリッド型蓄電池を設置するとパワコンは不要になるといわれる。(URL 1)
- 3 論語塾講師安岡定子の話による。